



Photo by
Hiroshi Takasugi



“ ～ アカガシの剪定 ～ ”

玄海ゆりの樹幼稚園 園長 高杉 洋史

8月に砂場の横のアカガシ(どんぐりの木)にスズメバチが巣を作りました。園長になって4年目になるのですが、初めての経験です。このアカガシも大きくなり、枝が混み風通しも悪くなったことでスズメバチに選ばれた可能性があるので、一念発起して剪定しました。木の成長が止まる冬に切るものと思っていたら、寒くなる前がいいようで、時期もぴったりです。葉にスズ病という黒い煤のようなシミもできたので、一石二鳥です。きっと春にはたくさん若葉が芽吹くでしょう。今回、剪定のことをインターネットで検索したら、草花も剪定しないとひよろひよろ伸び、その先だけに花がつくので、適当に剪定して分枝させたほうがふんわりとした株に育ち、たくさん花が楽しめるのとを知りました。そういえば去年のクリスマススのころ目を楽しませてくれたポインセチアがひよろひよろながら子育てラウンジで緑の葉をつけています。3株のうち一株が風で倒れ枝が折れたのですが、その株の方が新しい葉が元気よく育っています。風の力で偶然剪定された効果が出たわけですね。ポインセチアは9月から11月の光の管理によってクリスマススのころ花芽がつくとのこと、このポインセチアは緑の葉のまままで年末を迎えるのでしょうか。

植物によつては少しのストレスでも枯れてしまうものもあります。植物の中では強い方のサツマイモだって、苗から根が出る時期にエノコログサなどに取り囲まれると成長しません。苗を植えてからの

1か月は草取りをしてかわいがる必要があります。植物の種類によって、大事に育てないといけない時期はまちまちで、また剪定というストレスを与えないと良い結果が得られないこともあるのですね。

そういえば、子どもたちのスポーツフェスタの練習は、前半は暑かったし、特に年長さんはマーチングに体育のフォーメーション、リレーや綱引きに勝つ方法の相談や練習にと盛りだくさんでした。泣き言は聞こえてきませんでした。スポーツフェスタ間近の練習ではお昼ご飯の時間なのに綱引きの後にリレーもしようという意見が出るほどでした。立派な育ちを見せてくれました。子どもを育てている大人の方が育ちの姿を見せてもらってありがたいと言いたい気持ちです。植物の栽培も教育も奥が深い。興味が尽きません。



♪ ゆりの樹通信 vol. 4 ♪

吉塚ゆりの樹幼稚園
園長 高杉美稚子

1、スポーツフェスタでの感動に満ちた園児の成長した姿を思い出しながら・・・

「幸福とは、考える事、言う事、する事が調和している状態だ。」

「世界を変えたいなら、まず自分が変わいなさい」

「私の生きた人生がわたしのメッセージ」

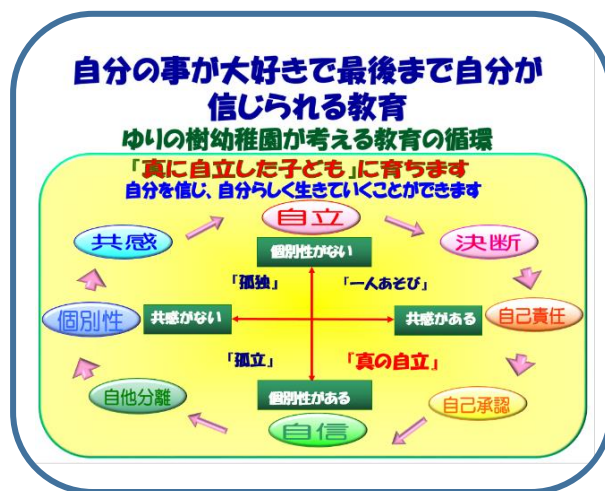
ガンジーの言葉



園児達のフェスタの取り組みの姿を思い出すと本当に清々しい。園児たちの心には邪気がないからです。本当に一生懸命取り組んでくれました。園児たちは、**自分が考えた通り行動し、思った通り伝え、その瞬間を、無理もせず、意識もせずに、自然体で生き抜き駆け抜けて**くれました。裏表のない一生懸命さに感動し、思わず、ガンジーの言葉を思い出しました。

大人になるにつれ、考えていることと、言うこと、することが様々な事情で変わって来ることがあります。周りの空気を読むことも大切ですし、人と調和していくには必要なことでもあります。やはり子ども達の姿を見ていて「言行一致」が大切だなと感じています。

子ども達は、だからこそ時に喧嘩が起こるわけですが、子どもの場合は、喧嘩したことは、自分の気持ちを抑圧せずに正直であった証拠、自分の気持ちが言えたね、とまずは受け止めてあげたいものです。もちろん、そのあとで、喧嘩したままで居心地がいいか、悪いか、自分に聞いて、この後自分でどう行動変化するか、自分で決めてもらうことが大切です。ゆりの樹の目指す自立の循環です。



大人の場合は人間関係において、信頼される大切なことはやはり、何よりも、言動と行動を一致させることではないかと思います。人の噂は、「何を言ったか」ではなくて「誰が言ったか」が重要です。ぶれないで、常に、言行一致している人の言葉には重みがあるからです。

ゆりの樹幼稚園がめざす人間像



- | 自分軸 | ⇔他人軸 |
|---|------------|
| 1. 心と体が健やかな人ー明るく、元気
人の良いところに焦点をあてることができる | ⇔適度 |
| 2. 謙虚な人ー清く、優しい
人の成長を自分の喜びとし、手柄を自慢しない、相手をたて、「ごめんなさい」が言える | ⇔健康 |
| 3. 正直な人ー自己肯定、素直
「わからないことはわからない、教えて、助けて」と言え、聞くことができる | ⇔健康 |
| 4. 感謝できる人ー他者肯定、愛らしい
起こることすべてを受け止めて、必要だった、だからよかったと感じ、「ありがとう」が言える | ⇔へつらい・ごますり |
| 5. 柔軟性がある人ーかしこく、温かい
外(クレーム・アクシデント) 内(自分の問題・ストレス)のどんな変事にも対応しようとする | |
| 6. 勇気がある人ーどっしりとして力強い
自分を信じて新しいことにチャレンジ、最後まであきらめないで一歩を踏み出すことができる | |
| 7. 自己責任がとれる人ー潔く、おだやか
自己承認し、言い訳をせず、人のせいにはしない
「だって・でも・どうせ」を言わないで、今、何が出来るかを考えようとする | ⇔貧乏 |

子ども達の成長のプロセスを見ることが出来るのは親と教師だけ。その幸せを感じることが出来る人、我が子、園児の幸せ、ひいては人の幸せが自分の幸せと感ぜられる人は、最も幸せな人になる。そして人に認められ、相手も自分もモチベーションを上げられるそんな陽だまりのような人になれる。

言っていることと、することが違っているのはあっという間に信頼を無くしてしまいます。「やると言った事は必ず実行する」、できない事は正直に「出来ない、分からない、教えて、助けて」を伝え、周りの人と共に支えあって、頑張る事が大切です。人間は一人では生きていけないからです。ゆりの樹の目指す人間像です。

言行一致の集団は強く柔軟な組織になるとも言われています。手前味噌な話で恐縮ですが、フェスタに取り組む職員の間からも、園児に対する一生懸命さと、真摯に取り組む真面目な態度、皆で助け合う協働の姿が感じられ、多くの感動をもらいました。

人生には成功も失敗も付き物ですから、どの職員にも、頑張っても、頑張っても自分の事をだめだなあと感じ、落ち込むことが多々あります。そんな時にも「保育の失敗は、保育で返す」を心に刻んで、毎日、毎日を自分と向き合っていて取り組んでくれた事に感謝でいっぱいでした。

ガンジーの言葉通り、「**今の現状を変えるならまずは自分から**」…ですね。

この年になると若い世代からも教えられる事もたくさんあります。学べる事は、誰からでも学んだ方が自分が豊かになります。人としての輝きは誰しも持っていますから、立場や年齢を超えて学ぶ姿勢を持ち続けることが自分に取っての徳になります。その意味では、園児に教えられることが一番多いのですが……



そして私自身も「**私の生きた人生がわたしのメッセージ**」が…が今年の私のテーマです。



今年度の始め、ふとしたきっかけから「過去の未完了の体験を完了させる」ことが出来たからです。これは過去の体験で言えなかった事、できなかった事をそのままにしていることで、未消化に終わった為に、非意識下で自分の行動を制限している事があるので、その体験を再体験することで、制限している行動を開放する、または取り除くことを意味します。

もちろん、過去に遡って再体験することは実際に出来ないわけですから、同じようなシチュエーションになった時に思い切って、出来なかった行動を試みる事にしました。

結果として気づいた私の制限している行動は「ええカッコしい」でした。だから、「ええカッコしい」はやめて、失敗は失敗でそこにそのままいる、その姿を周りにもそのまま見せる、伝えるという事です。これは 18 年前の巻頭言にも気づいて書いている事ですが、再度一部掲載します。



人生で何度、崖から飛び降りる崖っぴちの決断をしてきたか、「**自分を否定するもう一人の内なる声と負けてはならないという信念と自分を受容してリラックスを得たい**」という、相反する願いにつき動かされながら、それでも、無理をして前に進まなければならなかった私の人生の意味が最近ようやく理解できてきました。

それは、「**後からついてくる人に道を示しておく、そして次の世代に宝物を渡す**」事でした。私の生きてきた意味は、私がつらくても苦しくても、前進してきた意味は私の使命そのものでした。

例えば、失敗だらけの道であっても、それが足跡になるのであれば、それから学んでくれることがあれば、何の恐れもなく勇気を持って一步を踏み出すことができる。なぜならば、その事自体が私の生きる意味、生きていく道、使命、そしてそれこそが私の意志の力だからです。



自分のどんな無様な失敗の姿であっても、そのプロセスを一生懸命歩いた足跡であるならば、それをあえて残す、見せる、伝えることが、あとに続く人への道しるべになると 20 年近く意識してきて、やっと本当に腑に落ちた感じがしています。

そしてスポーツフェスタの園児達の姿から、子ども達は何も意識せずに自分らしくいるということが出来ているのだなあと、今一度、子どもの心に立ち返ることを感じさせてもらった、園児たちの育ちの姿にありがたいの気持ちで一杯になった、2 か月のスポーツフェスタ月間でした。貴重な時間に感謝、園児たちの真摯な取り組みに感動でした。



さて前号の続きです。

私たちが子育てをしている時に、良い子に育ってほしいと願うのは親なら誰しもです。皆わが子には良い子に育ってほしい、幸せになってほしいと願わない親はいません。最近では幼児虐待など、この規範すら危ぶまれてきている事は残念なことです・・・



私はどの親も自分の心や内面の問題が処理できずに、またはなぜそうしてしまうのか、自らの



心の問題に気づいていないで、起こしてしまった悲しい事件で、
どの親の心にも、わが子が幸せになってほしいという気持ちはあると信じています。
ただ、その表し方、行動が間違っている。けれど、その人の存在自体は否定したくない
きっとわが子を愛していたと感じてくれる日が来るに違いないと願っています。
すべての親はどんな事があっても、心の奥底では、子どもを愛していると私は感じるのです。

その上で、愛するが故にわが子の幸せを祈る、幸せを祈るゆえに、子どもに無理をさせていないか、負担を掛けすぎているか、に気を配る必要があります。だからこそ、私達の行動、表わし方が大切になってくると思うのです。愛しているからこそ、その思いが過ぎてしまう事があります。



では、私達の子育てはどうすればいいのでしょうか。こんなに親が愛していても、子どもは、「なぜ、愛されていない」と感じるようになるのか
こんなに親が思っているのに「なぜ、親がうざい」と嫌がられることがあるのか。
子どもの幸せを願っているのに「お前のせいで、こんなに育ってしまった」と親を恨むようになるのか、その事を、視点を変えて考えてみる事が大切になってきます。
青年期の子ども達の姿を振り返る事で、今、まだ、幼い子どもの子育てに大切な事、
転ばぬ先の杖になるようなこと、教えてくれることがたくさんあるように思います。



幼児期も心配な事はたくさんあるかもしれませんが、深い問題は、やはり、
青年期に顕著に現れてくるのです。幼児期に親の目を意識した見せかけの良い子では、
いつかどこかで、爆発してしまう事になりかねません。だからこそ、今、幼稚園児を
育てていらっしゃる保護者の方に知っておいて頂きたいのです。子育ての大切さを。
そして同時に親が必死になりすぎず、リラックスして楽しんで子育てをする事の大切さを。



15歳の中学卒業を迎えた頃に、人生の節目、ひとつの曲がり角がやってくると
言われています。そのときに、「ありがとう」の感謝の言葉と共に花束が届くのか、
自分の子育てを後悔する事になるのか、結果は後でしか分からないのです。
だからこそ、これから一緒に考えて行きましょう。10年後、20年後を見通して、
今出来る事をできる範囲でいいので、やっておきましょう。心に留めておきましょう。

さて最初の枠組みに戻ります。

① 「真に子ども自身にとってよい子」であってほしい

これはある意味当然のことですね。これが、私たちが目指す子育てです。

このことについては最後の項で述べましょう。

子育ての基本、そして、ゆりの樹幼稚園が目指す教育ですから。

そして、これが子育てにおいて、理解できていそうで 理解されていないのです。

なぜでしょうか。それは子育てにおいて次の二つの枠組みを持ってしまう場合があるからです。

残念ながら「真に子ども自身にとってよい子であってほしい」と「他者から見てよい子に育ってほしい」

「親である自分にとってよい子に育ってほしい」は同列ではなく、相反するものだからです。



② 「他者から見てよい子」に育ってほしい

このように感じている親はつい、「過干渉」「過期待」（子どもが望んでいないのに、過剰に世話をし、心配し、期待をかけること）の子育てをしてしまいがちです。（「過干渉」「過期待」については、詳しくは先の巻頭言をご覧ください。）他者から見てよい子に育ってほしいと願って子育てをする時、つい、子どもに過剰にしつづけを厳しくしてしまいがちです。しかも、そのとき親がこう思うからというしつけ方ではなく、「人から笑われないように」とか「人がどう思うの?」と押し付けの教育をしてしまうことになりかねません。



電車の中で、暴れていたりする時に「運転士さんに叱られるからやめなさい」とか「そんなことしていたらおばあちゃんに叱られるよ」と親の責任ではなく他者の権威を借りて、叱ったりもしてしまいます。

そうやって、人の目を気にして、エネルギーを溜め込んでいい子を演じいい子でありすぎると、思春期になって、心の問題が生じてくることはもうすでに知られるようになってきました。

「子どもがどうしたいか」「子どもがどう感じているか」ではなく、その感情を我慢して大人に合わせているところが後々、問題になってくるのです

だから先月にも書きましたが、ゆりの樹幼稚園の教育理念「心の教育」が大切に

なってくるのですが……。さらに親の責任で、叱られたのならまだ、親の目だけですが、そこに他者を持ち出されると常に見えない世間に怯えて行動するようになりかねません。



いつも他人が、どう思うか、他人がどう自分を評価するかという中にいると、人間はリラックスが出来ず、いつもその影に怯えていなければなりません。問題は、子どもにこのようなしつけをする時、親は自分自身がそのような育ちをし、自分自身が見えない世間に怯えていることに気づく事が大切です。

親自身がそのように感じていると、その自分の内面の不安を隠すために、子どもの世話を余計に焼くという事がおきます。過剰に世話をすることや、子育てに過敏になることによって、自分の不安を解消しようとしてしまうのです。人は「自分の思いは人もそう思っている」と感じがちです。これは心理学用語で言う「投影」と呼ばれるのですが、自分が不安を持っていると、その不安が子どもに投影されて、子どもも不安に違いないと思うことを意味します。そして、「不安でしょ。不安でしょ」という意味の言葉かけをするので、子どもも不安だと思い込むようになるのです。



心理学では、「自分の思うように自分はなる」と言われているのもこの為です。自分は、不安で不幸せになるに違いないと言い続けているとそのようになると言われています。なぜかという、自分がそう決めているわけですから、小さな幸せがあっても、それを幸せとは感じないで、不平不満を言ってさらに不幸せになるということを自分がしてしまうからです。「ほら、不幸せでしょ。」とそのことの証明をしていくのです。

そして、「自分が自分のままでいい」と思えない、その満たされない思いを子どもにぶつけてしまう事になります。結果として過剰に世話をされ、先に先に、体験を摘まれた子どもは「指示待ち症候群」になり、小さな挫折を体験しないまま、大きな挫折にぶち当たるので、傷つきやすく、壊れやすくなります。

過剰に期待されることも、子どもにとっては、「期待通りになったら愛してあげる」

「期待通りにならない時は……」という親の心の裏のメッセージが伝わり、子どもは頑張りが過ぎてしまうか、心が折れることになるかもしれません。



周りにいる大人はもっと心配してさらに「過干渉」「過期待」が増すという悪循環に陥ってしまうのです。親の不安を子育てで解消しては子どもがかわいそうです。そして、子どもがかわいあまり、知らず知らずのうちにこのことをしてしまっている可能性があります。また、自分の不安が引っ張り出され、強く叱ってしまう時、親自身がよい子育てをしている、よい親であると周りから認められたい、自分の評価にしたい。「だめな親」であると思われたくない恐れでしていないかという事にも気づいてほしいのです。

皆と同じように、よい子に見えるようにと焦ってしまう心は、自分がしつけられてきた子育てであることが多い事は事実です。自分自身も幼いころからずっと他者から見てよい子であろうと頑張ってきた結果です。子育てが時に辛いのは、そうやって自分自身と子どもの頃の自分の育てられ方の記憶を呼び覚まされるからです。



往々にして私達は親に育てられたように子育てをしてしまいがちです。もちろん「反面教師」ということも あるでしょうが、母親に言われた事、されたことはしたくないと思いつつ、「ハッ」と気づくと同じような事を言ってしまったと、自己嫌悪になる経験をされた方もいることでしょう。だから、「子育ては自分の育て」なのです。子どもは親の鏡なのです。



自分を写す鏡なのです。だから子育てでは自分と向き合う事から始まってしまうのです。でもいいのです。気づかなければ変わりようはありませんから。すべて大丈夫です。そのような自分であることに気づいたところから出発です。気づくから変わるのですから。遅くとも気づかないよりいいのですから。



③ 「親である自分にとってよい子」に育ってほしい。

次に「親である自分にとってよい子」を望むとき、親は子どもの嫌がる姿を見たくなくて叱れなくなります。先月号の5つの過ぎたるかかわりで言うところの「過許可」「過放任」の子育てです。時に「過保護」も入ります。子どもの機嫌がよかったり、いい子の顔を見せてくれれば、親も安定していられるのですが、子どもがぐずったり、悪いことをしたり、不満を持ったりすると、自分の不安が喚起されます。



非意識下ですが、その不安を受け止められない時、子どもを適切に叱れない、子どものしつけ、規範が出来なくなります。そして、この親の不安は、子ども以外の周りの人に向けられることになります。子どもの為にこんなにしてあげていると、周りに対して苦情や不満を言って、相手が悪いあなたは悪くないと守ってあげているという姿勢を示し、子どもと一見、民主的な関係を保つことで自分の不安や葛藤を見ないようにします。



いつもニコニコして親を癒す役割をになうことによって、または、反対に辛いことばかりを言って親の不安を喚起し、子育ての仕事を作ることによって子どもは愛されるという立場をますます会得していかざるを得なくなります。子どもは、どのようにすれば、親に愛されるかを、学び、そのように振舞っていきます。子どもは本来、不快な時は自分の気持ちをぶつけて、泣いたり、ぐずるものです。



でも、その感情を出すと親の不安が喚起されることを肌で感じ取った子どもは、その感情を抑えて出さないように、愛されるように努力せざるを得ません。いつもニコニコし続けている子でいなくてはならないのです。または、いつも不平不満を言うことで親の仕事を作ること、自分を保てなければいけません。こんな子はひょっとするとにっこり笑って大丈夫と言いつつ一人苦しんでいるのかもしれません。結果として、不平不満を言うことで、自分自身の心を不健康にしていくかもしれません。

本当は自分で解決能力があるのに、親が先に経験を摘み取ることは、本当に自分がやれば出来ると信じてもらえていない、愛されていないと子どもは感じて生きます。

このことは、2と同様、親の育ちのプロセスと関係してきます。根本的に親の不安を埋めてくれ、理想を満たしている間はいいのですが、子どもが親より先に、真の自立を遂げた時は、親のほうが精神的に見捨てられたと、また不安になるのです。だからますます、口では子どもの自立を願いながら、子どもが本当の自立が出来ないように「過保護、過干渉、過期待、過放任、過許可」という「五つの過ぎたるかかわり」をしてしまうことになるのです。



だから、知らないうちに、親の問題を子育てに反映してしまっている、親の不安を埋め合わせすることで、子育てをしていると、子どもは、決して自分にとっていい子には育たないのです。だから、親の不安を子育てで解消してはならないのです。

では、「子どもにとって子ども自身がいい子でいるために」親はどのような子育てをしたらいいか、親の姿はどうあったらいいかということです。難しい問題ですが、その答えは、ゆりの樹幼稚園の教育理念の中にあります。

我が子を愛するという、気持ちはみんな同じ、いかに、そのことを、我が子の負担にならず伝えるか、「すべては感情に気づいた親としての行動変化」にあります。子育ては、親自身が「自分を愛する、自分自身を受容する」という過程にほかなりません。だから大丈夫です。すべての答えは自分自身の中にあります。



だからガンジーの言葉からも感じられる

「言行一致」「自分が変わると周りが変わる」

「どんな姿であれ、歩んだ道を我が子に示すことが、私の生きた人生がわたしのメッセージ」に

繋がるのだと思います。紙面がなくなってきました、続きは次号です。